

中国語圏映画研究に投じられた一石

西村 正男

近年、中国語圏における日本表象や、中国語圏と日本の映画交流に関する書籍が相次いで出版されている。弓削俊洋編著『中国・台湾における日本像——映画・教科書・翻訳が伝える日本』（東方書店、二〇一一）や、劉文兵『中国一〇億人の日本映画熱愛史——高倉健、山口百恵からキムタク、アニメまで』（集英社、二〇〇六）、同『証言 日中映画人交流』（集英社、二〇一一）、あるいは邱淑婷『香港・日本映画交流史——アジア映画ネットワークのルーツを探る』（東京大学出版会、二〇〇七）など。やや古い時代を扱ったものとしては晏妮『戦時日中映画交渉史』（岩波書店、二〇一〇）や三澤真美恵『帝国』と『祖国』のはざま——植民地期台湾映画人の交渉と越境』（岩波書店、二〇一〇）も挙げられよう。

私自身はもともと映画研究を専門としてきたわけではないが、本務校や非常勤先の講義においては、これらの著作を参照しながら、中国語圏の映画を（私自身が近年研究対象としている中国流行音楽と併せて）主に日本との関わりに焦点を当てながら論じてきた。この度出版され先となる一冊が林ひふみ氏の『中国・台湾・香港映画のなかの日本』であるが、この本も明治大学理工学部における総合文化ゼミナールが元になっているそうである。同書で取り上げる映画の多くは、私が講義で取り上げる映画と重なっており、林氏がこれらのフィルムに対してどのような新たな視角や知見を提示されるのか、期待しながら読んだ。

第一章「中国戦争映画の『日本鬼子』」

林ひふみ著
中国・台湾・香港映画の
なかの日本



四六判 300頁
明治大学出版会刊／
丸善出版発売 [2100円]

では、中国大陸の映画、特に『紅いコリーヤン』さらば、わが愛 霸王別姫』『鬼が来た！』が取り上げられる。一九三〇年代以降の満洲事変／日中戦争を描いた映画を「抗日映画」としてまとめた上で上記三作の背景やプロットの概要を紹介している。

第二章「台湾映画の日本家屋という亡霊」では、台湾映画史をまとめたあと、ニューシネマ期から九〇年代前半の四本の映画、すなわち『冬の夏休み』『童年往事——時の流れ』『牯嶺街少年殺人事件』『多桑 父さん』を取り上げる。この章は、林氏自身の台湾映画に対する見解が強く出た部分である。例えば先行研究である門間貴志氏の労作『アジア映

画にみる日本 I 中国・香港・台湾編」(社会評論社、一九九五)が日本の要素を含む台湾映画をリストアップすることを優先し、映画そのものの分析にはあまり紙幅が割かれなかったのに比べると、監督のエスニシティ、すなわち外省人か本省人かに基づいて、映像を分析している点で、独自性が現れている。林氏によると、台湾ニューシネマを代表する監督である侯孝賢の映画は、「ノスタルジアを表現したものというよりは、少数派の外省人の目から見たエキゾチズムを映し出して」いて(八二頁)、それが本省人の観客に受け入れられなかった原因だということである。また『童年往事』などを分析する際には、外省人と彼らが住んだ日本家屋との相克に焦点を当てる。その分析は必ずしも完全に首肯できるものではないとはいえ、これまでの定説とは異なる一つの読解を提示したのもとして、貴重である。また、ここで取り上げる監督のうち唯一の本省人である呉念真の『多桑』を分析する際には、本省人の日本に対する思いをノスタルジアとして片付けるの

ではなく、歴史的文脈を踏まえながら、そこから屈折した感情を読み解こうとしていることも興味深かった。

第三章「香港映画の『荒唐無稽』な日本」でも、特に北京語映画を中心とする香港映画史をまとめたあと、香港ニューウェーブ以後の三本の映画、すなわち『風の輝く朝に』『客途秋恨』『恋する惑星』が取り上げられる。ここでは、林氏の独自性が強く現れているのは『客途秋恨』に対する見解だろう。許鞍華監督の『客途秋恨』は一般的には、残留婦人として中国に留まって中国人と結婚し香港やマカオで暮らした母親に対して距離のあった娘が、母とともに日本旅行をすることにより、母が異郷で味わった孤独感を理解し和解する物語と解釈されている。一方、林氏は、母親役の陸小芬の形象にリアリティが欠如していることを指摘し、またヒロインが心から思う相手は祖父母であることから「この娘は母親を理解できなかったのだ」という印象をこの映画が残してしまうことを指摘している。

以上の章で、九〇年代までの中国大陸・

台湾・香港それぞれの映画における日本表象をひと通り分析したあと、最後の二章ではそれぞれ中国大陸、台湾の二〇〇〇年以降の映画における日本表象が取り上げられる。まず第四章「中国映画と高倉健」で扱われるのは、張芸謀監督の『単騎、千里を走る。』と馮小剛監督の『狙った恋の落とし方。』である。高倉健を俳優として起用した前者、また高倉健映画へのオマージュ／言及が数箇所で見られる後者を紹介しながら、近年の中国大陸における映画界の構造変化についても紹介がある。ただ、後者の熊の着ぐるみが登場するシーンを『君よ憤怒の河を渉れ』で「中略」杜丘が「中略」中野良子と出逢ったシーンのパロディになっている(二二頁)とし、「四〇歳以上の中国人ならば、みんなが笑えるギャグ」(二二頁)だと断定するのは、そのような読みも可能であるとはいえ、些か強引であるように感じた。

最終章の第五章では楊徳昌監督の『ヤンヤン 夏の想い出』と魏德聖監督の『海角七号——君想う、国境の南』が取り上

げられる。前者からはニューシネマへのオマージュが読み取られ、また監督の出自から来る日本に対する矛盾した感情が融解したあと、普通の異郷として日本を描いたものと解釈される。後者に対しては、日本への関心は薄く、むしろ台湾の異なるエスニック・グループや異なる世代の和解の物語であると読解されている。

著者の林ひふみ氏は、「新井一二三」の名前で新聞記者、コラムニストとして香港・台湾などで活躍されてきた。その中国語の文章の流暢さには定評があり、数多くの中国語の著書がある。その一方で、日本語でも『中国中毒』『中国語はおもしろい』などの著書を出版し、二〇〇八年より准教授として明治大学で教鞭をとっている。このような経歴が示すように、本書も非常に読みやすい文体で書かれており、アカデミズムの世界以外の一般読者にとっても敷居が低い書物であると言えるだろう。

ただ、映画研究の視点から見た場合には、気になる点が少なくなかったのも事実である。まず、本書には注釈が付けら

れておらず、依拠した資料が何であるのか、あるいはどこからが筆者のオリジナルの見解かがはっきりしていない点である。大学の授業が元になっているのことであり、授業の際には一々依拠した資料を挙げるわけにはいかなかったのかもしれないが、書籍として出版する際にはぜひ根拠を示していただきたいかった。

また、残念なことに明らかな誤字や事実誤認も少なくないように思われた。やや細かくなるが、以下に気になった点を列挙する。

・『風雲児女』の主題歌であり、中華人民共和国国歌にもなった曲は「義勇進行曲」とされている（一六頁ほか）が、正しくは「義勇軍進行曲」である。

・日本と中国語圏の映画交流において重要な人物である川喜多長政の名前は、「川喜田長政」と誤記されている（七〇、一三二頁）。

・香港のショウ・ブラザーズに招聘された井上梅次監督は、同社で『嵐を呼ぶ男』のリメイク『青春鼓王』を撮ったが、「オリジナル」では石原裕次郎が歌った主題歌

も、おなじメロディーのまま中国語訳で歌われた」とあるのも事実誤認である。似たような意味の歌詞を持つ曲は登場するが、全く別の曲である（『青春鼓王』の音楽担当は服部良一）。

・ブルース・リーが香港に戻ったあと初めて主演した映画は『ドラゴン危機一髪』と記されている（一三八頁ほか）が、映画の題としては『ドラゴン危機一発』が正しい。

・張愛玲の小説『色・戒』がおよび映画『ラスト・コーション』のモデルになった実在のスパイ、鄭蘋如を「鄧蘋如」と記している（一八〇頁）。

・本書では、敵が日本軍であることをはっきり描けなかった三〇年代の「国防電影」も、『一江春水向東流』などの戦後に撮られた、戦争を背景とするメロドラマも、一律に「抗日映画」と呼んでいるようである。ならば「一九七二年に日本が『中略』中華民国と断交したのちになって、ようやく台湾は日本映画の輸入を禁じ、抗日映画を製作する」（二二六頁）とあるのは、事実と反するのではないか。『一江春水

『向東流』は台湾で一九六五年にリメイクされていて、現在は台湾でDVDも発売されている。抗日スパイ映画も七一年以前にも数多く作られており、やはりDVDが出ているものとしては『重慶一号』(一九七〇)などがある。

・人名索引も、姓の五十音順に並べるのではなく、日本における一般的呼称の頭文字で引かなければならない。呉念真(ゴニエンジン)は「あ行」、許冠文(ホーイ)は「ま行」、フランソワ・トリュフォーは「は行」となっていて、大変引きにくい。なお監督名のルビは日本で通用している名をふったとのことだが、章子怡は「チャンツー」となっている。

以上、少々仔細に過ぎたかもしれない

が、気になったことを列挙してみた。林氏の映画に対する解釈は、長年のジャーナリスト経験に裏打ちされた鋭さを備えている。「ノスタルジー」や「親日」等の言葉では覆いきれない部分に注目して議論を展開している点は刺激的だったが、映画史の正確な記述と実証に支えられなければ、個人的感想に留まってしまう恐れもあるかと思う。先に書いたような台湾ニューシネマ、あるいは香港ニューウェーブの『客途秋恨』に対する見解も、問題提起としては興味深かったものの、具体的資料を提示しながら論じていただければもう少し説得的になったのではないか、とも感じている次第である。

私は林氏がエピソードで言う「中国が

単純な反日ではないように、台湾も単純な親日ではない。それぞれに深い思いがあり、その心の動きが多くの映像作品に投影されている。ひるがえって、日本人は、日本映画は、中国や台湾に対し、どのように深い思いを抱いてきたのだろうか」(二六五頁)という言葉に全面的に賛成である。冒頭で述べたように、近年、中国語圏と日本との間の映画交流について実証的な研究が進んでいるが、そのような実証性をも兼ね備える形で、林氏がさらに研究を進められ、次の著書を出版されることを心待ちにしたい。

(にしむら・まさお 関西学院大学)

山本和義著 理と詩情

中国文学のうちそと

蘇軾のこと、唐宋の詩文、歳時記、師友回憶等のテーマに分ち、蘇軾の文学に魅せられて五十余年の研究生活が続けてきた著者の軌跡を一冊に収輯する。

2940円

研文選書 114

台湾原住民社会の 地方化

マイノリティの20世紀

台湾先住民の20世紀を、エスニック・マイノリティのおかれた政治状況に焦点を絞って論じた本格的な一冊。膨大な資料とフィールドワークをもとに丹念に検証。

7350円

松岡

格著

好評既刊

岸本美緒著

明清史論集

① 風俗と時代観

研文選書 112
2940円

② 地域社会論再考

研文選書 113
2940円

社会秩序論への関心を基調とし、①には時代区分論と風俗論を、②には市場論と暴力論を中心に、中国史上の諸トピックを広い視野から描く。

研文出版

東京・神田神保町2-7 ☎3261-9337
http://www.kenbunshuppan.com/